

青森県立美術館 𠂇 AOMORI MUSEUM OF ART

〒038-0021
青森市安田字近野 185
Tel 017.783 3000
Fax 017.783 5244
E-mail bijutsukan@pref.aomori.lg.jp
www.aomori-museum.jp



土の溝（トレンチ）

土の壁、土の床でできた、ダイナミックな風景です。隣接する三内丸山遺跡の発掘現場の雰囲気を拡大したスペースです。屋外での作品制作や展示、パフォーマンスなどに使用する場所です。



八角堂

弘前市出身の美術家・奈良美智によるコミッションワークのひとつ。美術館南側の浮島にレンガづくりで建てられています。屋根がなく、季節や天候、時間を意識しながら作品を鑑賞することができます。



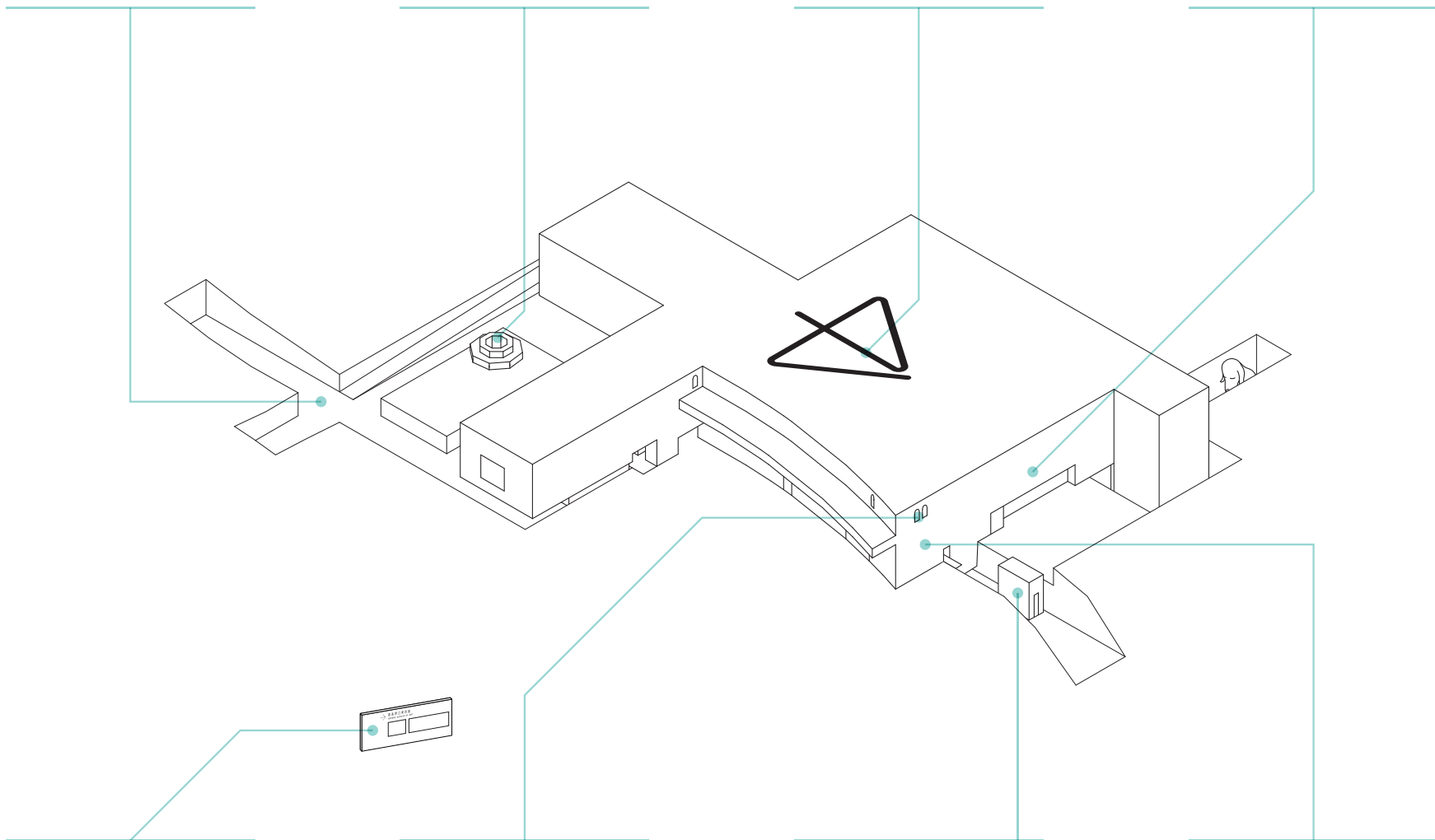
巨大なロゴマーク

屋上には、30mもの大きさのロゴマークがひとつ、真北の海の方に向けて描かれています。飛行機に乗ったときはこのマークを目印に美術館を探してみてください。



真っ白なレンガの外壁

約43万個のレンガはすべて手積みのため、全体がうねるような味わいがあります。やがて壁は展示室に入り込んでいき、そのまま作品をかけられるようになっています。



案内板

美術館の案内板は、それ自体が白いキャンバスであるかのようなレンガの壁を切って持ってきたつくりになっています。そこに手描きでマップや美術館名が描き込まれています。



不思議な開口

開口まわりのレンガは45度にカットされていて、厚みがないように錯覚されます。窓の形とも微妙にずれていて、レンガの壁紙を切り抜いて貼り付けてあるように見える効果を狙っています。



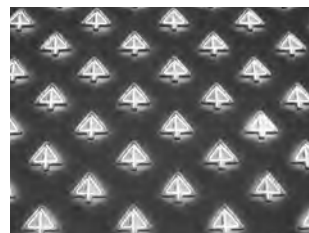
あおもり犬連絡通路

《あおもり犬》の目の前まで近づくための通路。途中、土の壁に囲まれた屋外展示室からは室内の展示室ものぞくことができます。



ネオンサイン

ひとつの形が「a」や「木」を現す青いネオンが沢山集まって「森」を表現しています。この「青い森」が美術館のシンボル。日没後一斉に点灯するようプログラムされています。





15cmのすきま

高さ15cmで壁がぐるりと浮いています。ここは階段を含めた壁全体が上からつり下っていて、浮いた部分は空調の空気の吹き込み口として展示室のとても重要な機能を担っています。



土の壁、床

三内丸山遺跡の発掘現場から着想を得て設計された美術館の、もっとも特徴的な部分。掘込まれた溝（トレンチ）に、白いキューブが降りてきて、美術館の中に「空間」を出現させています。



白い空間

上から降りてきた白いキューブの中は、天井も壁も床も真っ白い空間となります。部屋に光が充滿したような、浮遊感のある空間です。壁にかけた作品に光がきれいにまわり込む効果があります。



柱のない半屋外空間

12m×15mの天井を柱なしで支えているダイナミックな空間です。ここは、ワークショップとつながっており、大型の機械を使ったり、大きな音が作業等ができるようになっています。



キッズルーム

絵本を読んだり、玩具で遊んだりすることのできる部屋です。天井には美術館設計者の青木淳と美術家の杉戸洋によるインスタレーション型の照明が設置されています。



ワークショップ前廊下

ワークショップ前廊下からは、展示室Cを見おろすことができます。また、隣接する展示室Hと連動した利用も可能。アーティストによる公開制作等が行われることもあります。



ショップ

コンセプトは「庭の部屋」。床は芝生色のカーペット、水銀灯が空間を明るく照らし、カフェから眺めると外の芝生と連続した庭のように見えます。



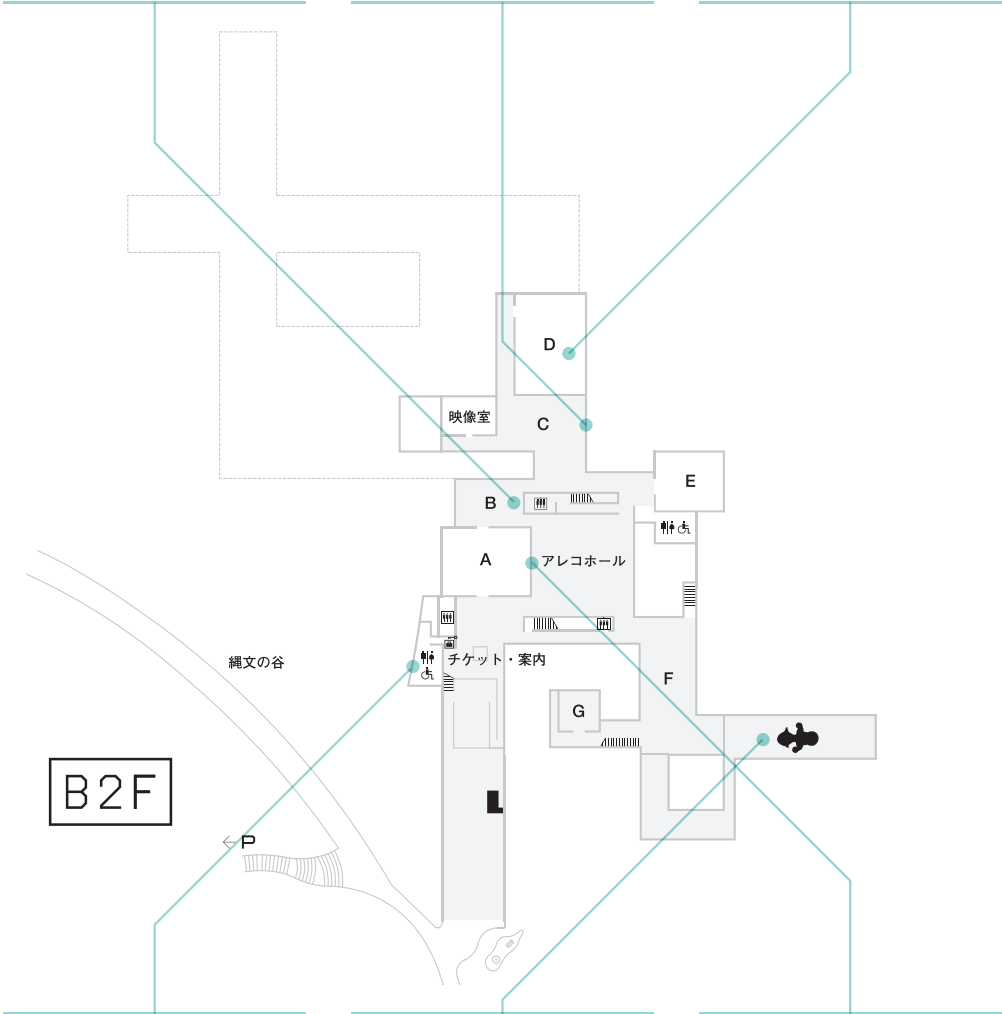
カフェ

カフェの鉄骨には耐火性能を持たせるために被覆がしてあります。それがまだ固まらないうちにスタンプを押し、植物模様のレリーフを施しています。カフェ限定のアクセントです。



内部のような外部通路

建物の東側と西側をつなぐ通路で、図書室やコミュニティホールの入り口にもなっています。壁も天井も4.5mmの鉄板を白く塗っていて、やわらかい反射光のトンネルになっています。



トイレ

一見真っ白なトイレに見えますが、実はタイルの目地の色だけを薄いピンク色にしています。そうすることで空間がほんのりピンク色になって、入った瞬間少し華やいだ気分になしてくれます。



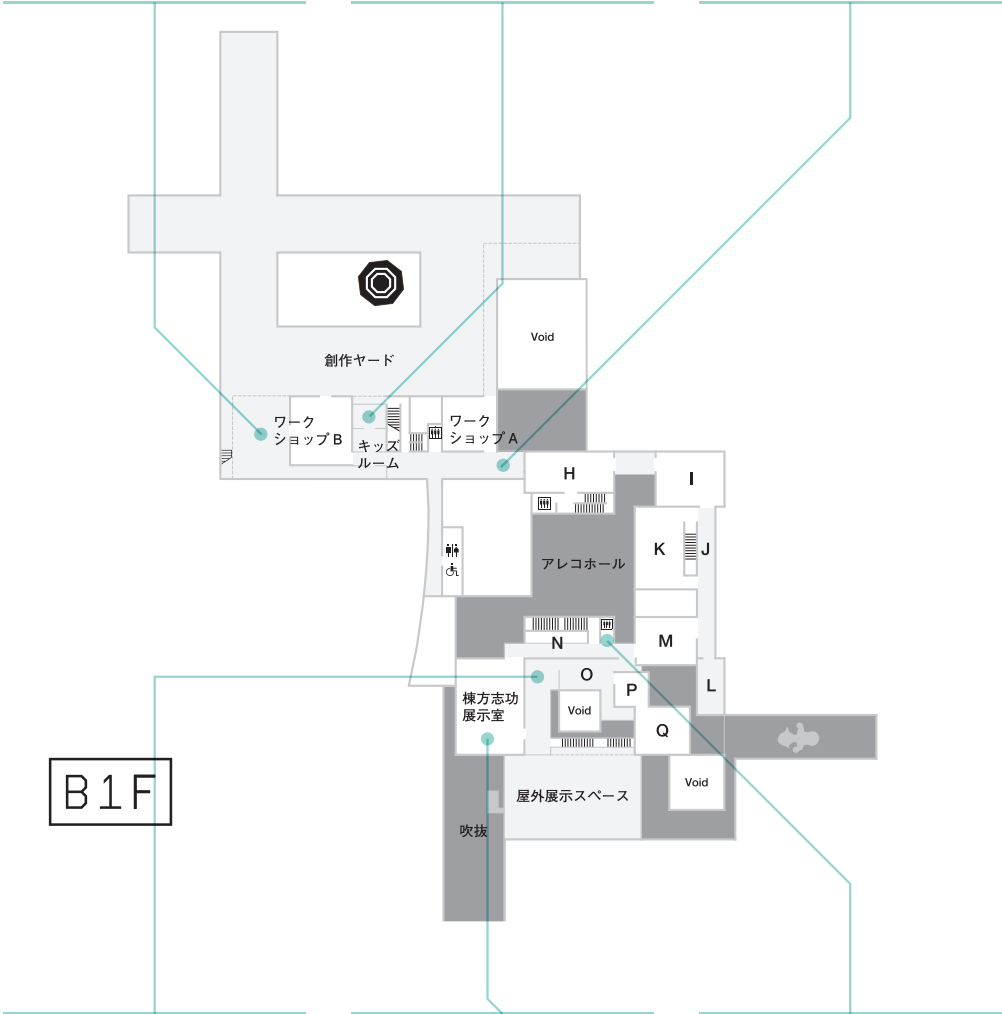
あおり犬

弘前市出身の美術家・奈良美智によるコミッションワークのひとつ。雪が降ると、頭の上に積もった雪が帽子のようになり、いつもとは違った表情をみせてくれます。



動く巨大な壁

幅約16m、高さ16mのとても大きな壁面の向こうには、シアターがあります。この壁面が床下のビットスペースに収められることによって、シアターから「アレコ」が鑑賞できるようになります。



レンガの展示室

展示室Oは白いレンガの空間。よく見ると、外壁が回り込んできた隙間の空間をガラスで仕切ってつくられた部屋であることがわかります。青森県立美術館を特徴付ける空間のひとつです。



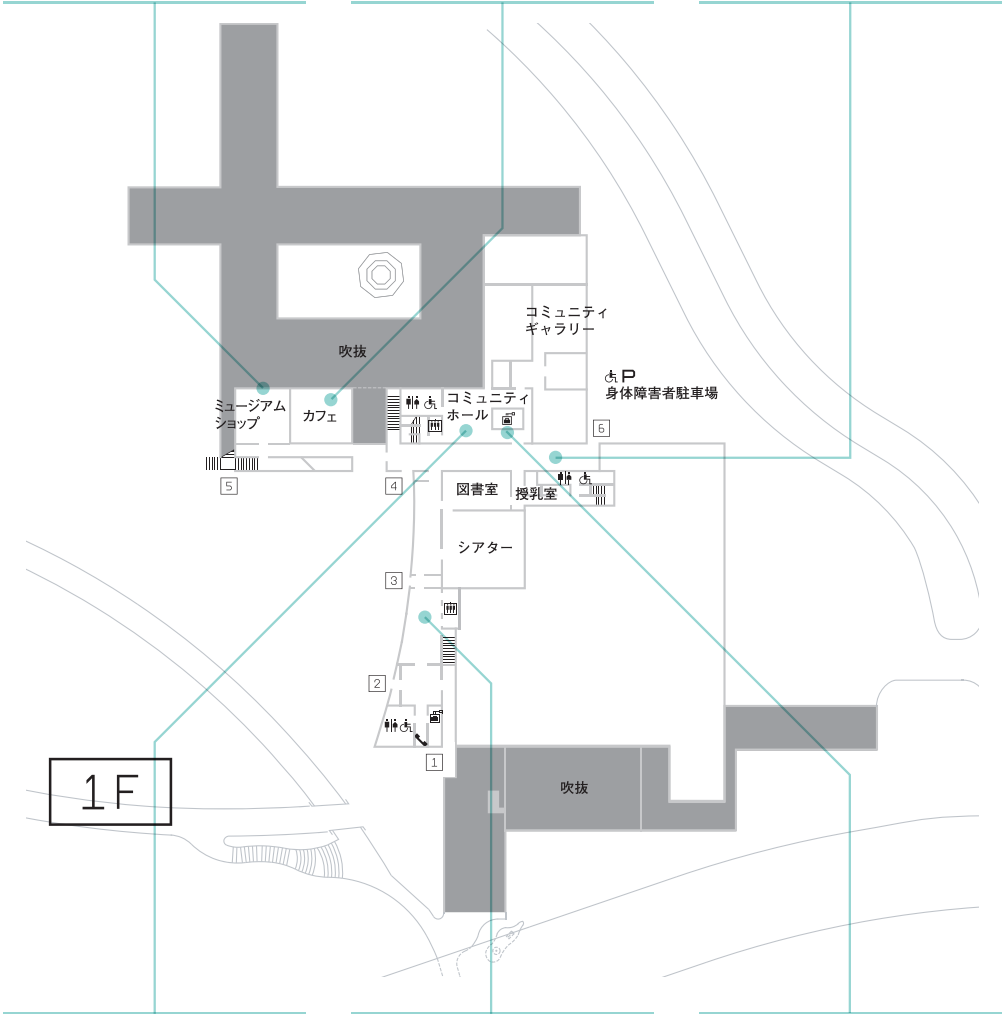
棟方志功展示室

唯一作家名が付けられている展示室。壁一面に設けられた巨大なガラスは、床から立ち上がり天井まで届いています。作品鑑賞の目障りにならないようにとの配慮からうまれた美しい空間です。



展示室内のエレベータ

このエレベータにはベンチが設けられています。B1F～B2Fの移動時間は約15秒ですが、どの場所おいてもくつろいでいただきたいと考える、美術館の姿勢の現れです。



コミュニティホール

このホールはコミュニティギャラリーやワークショップへとつながっており、どこから入ってきても同じ見え方になるように、内装がすべて同じつくりになっています。



サイン

サインの文字は、斜め45度・水平・垂直の直線だけで構成されていて、傘立てのキーやロッカー番号、自動ドア表示、消火器表示に至るまで、すべてオリジナルフォントで統一されています。



ロッカー

既製品を使わずに、すべてオリジナルで設計、施工されているロッカー。ロッカーの鍵に至るまで、すべてオリジナルフォントが使われており、館内でも人気の撮影スポットとなっています。

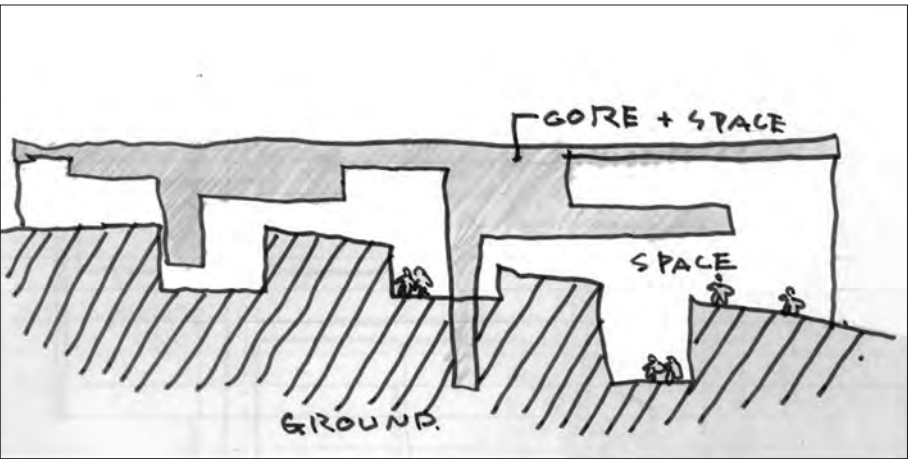


建築について

青森県立美術館は、建築家・青木淳によって設計されました。この建築は、隣の「三内丸山遺跡」の発掘現場から着想を得ています。発掘現場のトレンチ（壕）のように、地面が幾何学的に切り込まれています。その上から白く塗装された煉瓦の量塊が覆いかぶさっています。上の量塊の下のも、凹凸を見せています。土の上向きの凹凸と量塊の下向きの凹凸が、まるで並びの悪い歯列かのように、気ままに、隙間を持ちながら噛み合わされています。これがこの建築の基本構成です。

こうしてこの美術館は、古今東西まったく存在したことがなかった展示空間を獲得することになりました。それは、量塊のなかに設けられた真っ白な「ホワイトキューブ」の展示室と土の床や壁が露出する隙間の「土」の展示室が、対立しながらも共存する強度の高い空間です。

そして、ここは「ひとつの街」のように楽しめる場所です。決まった導線はありません。はじめて訪れた街を散策するように、自由に歩いてみてください。思いがけない場所に会えることでしょう。この建築案内では、建物の様々な見どころを紹介しています。これを片手に館内散策をお楽しみください。



青木淳によるコンセプトスケッチ



見学に際するご注意

- 作品にはお手を触れないでください。
- 展示室内は飲食禁止です。
- 展示室内は撮影禁止です。[あおり犬]のみ撮影可能です。
- 展示室内で利用できる筆記用具はえんぴつのみとなります。

作品保護のため、ご協力お願いいたします。